

| | |
|--------------|---|
| Title | 名詞句に接続するガ・ケドの用法 |
| Author(s) | 齊藤, 美穂 |
| Citation | 阪大日本語研究. 19 P.17-P.48 |
| Issue Date | 2007-02 |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/4003 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

名詞句に接続するガ・ケドの用法
The use of the conjunctive particles 'ga' and 'kedo'
connected to a noun phrase

齊藤 美穂
SAITO Miho

キーワード：接続助辞、名詞（句）のタイプ、コピュラ形式、指示詞

【要旨】

接続助辞ガ・ケドの用法については、既に多くの研究がなされ、様々な用法があることが認められている。本稿では、対象を、名詞句にガ・ケドが接続している例にしぼって分析を行い、そこに見られる文法的諸特徴とガ・ケドの用法との関わりを考察する。

まず、ガ・ケドの接続する名詞句に、主語に相当する語句があるかどうか、ある場合にはその種類の違いによって、3つの主要なタイプを認めた。さらに、数量名詞に特有の例を第4のタイプとして認めた。そして、各タイプの例を、文の構造、名詞句のタイプ、名詞句の伴うコピュラ形式の制限の有無、主文のタイプ、といった観点から分析し、その結果、これらの文法的側面に生じる制約が、特定の用法と結びついていることを明らかにした。

1. はじめに

接続助辞ガ・ケドをめぐっては、既に多くの論考がある。両形式は「逆接」を表す代表的な接続助辞とされるが、それ以外にも様々な用法をもつことが認められている。

ガ・ケドの用法全般を広く扱った先行研究では、その用法の分類は主に、ガ・ケドを介して接続した文と文（あるいは部分）に示された内容の、意味的な関係の違いに基づいたものとなっている（永野1951、森田1980など）。また、「逆接」「対比」「前置き」「主題の提示」などと称される、個々の用法を取り上げたものでは、対象となる用法の例に見られる文法的な特徴についての記述が部分的になされてはいるが、他の用法の例とはどう違うのか、という点は明確でない（野田1995、丹羽1998、高橋1999など）。用法の異同とその文法的な特徴との相関性について、総合的で詳細な分析を行っている研究は少ない。

本稿では、まだ全体的考察は行えておらず、ガ・ケドが名詞句に接続する例という、非

常に限定された対象に止まったものであるが、その用法と文法的特徴との関わりを視野に入れた分析を試みる。

まず、以下の例を見られたい。すべて名詞句にコピュラを介してガ・ケドが接続する例である（該当する箇所に下線を施して示す）。

- (a) これはなかなかいい曲ですが、新鮮さに欠けますね。
あの選手は中学生だけど、シニアの大会で入賞しているんだ。
- (b) (これは)私の推測ですが、あの選手が優勝すると思います。
(これは)噂だけど、あの選手は今度の大会には出ないらしいよ。
- (c) この曲ですが、なかなかいいですよ。
あの噂だけど、本当なの？

上記(a)では、ガ・ケドを介して、文と文（節と節）が結びついており、その間には、「逆接」関係が認められる。しかし、(b)(c)はそうではない。また、(b)と(c)の間でも、ガ・ケドの用法には違いがあるように感じられる。実際、先行研究においても(b)と(c)のような例は区別されており、例えば小出（1984）では、それぞれ「発話行動への注釈」、「談話主題の提示」という異なる用法に分類されている。以下、(a)から(c)の例に見られる特徴を見てみよう。

(a)では、名詞句「いい曲です」「中学生だ」が、述語として機能しており、主語である「これ」「あの選手」の特徴を述べるものとなっている。

一方(c)の名詞句「この曲です」「あの噂だ」は、述語としては機能していない。この場合の名詞句は、小出（1984）、高橋（1999）などで指摘されているように、「【名詞句】+だが」の形で「主題」を表す機能を果たしていると考えられる。談話構造を無視すれば、「この曲はなかなかいいですよ」「あの噂は本当なの？」のように言い換えることが可能なものである¹⁾。

(b)は、(a)と(c)の中間的用法であると考えられる。名詞句「噂だ」「私の推測です」は、述語として機能しているとも考えられるが、対応する主語となる「これは」が指し示しているのが、ガ・ケドに後続する部分（「あの選手は今度の大会には出ない」「あの選手が優勝する」）である点で(a)とは異なる。このような関係になるのは、名詞句の主語に相当する語が指示詞「これ」の場合に限られる。「あれは噂だけど」「それは私の推測ですが」では、このような関係は実現しない。ただし、3節で述べるように、この用法では、「これは」がなくてもかまわない。

このように、用法の異同には、文法的な特徴の違いが関わっている。本稿では、上記のような、名詞句にガ・ケドが接続する例に対象をしぼって分析を行い、その用法と文法的

な特徴の関わりを明らかにすることを目指す。ただし、(a)のように、文法的な制約があまりないものについては、その用法との関わりが捉えにくい。そこで、本稿では、上記(b)や(c)のように、文法的な制約のあるものに特に注目して記述していく。

もちろん、ガ・ケドの用法全般を記述するには、当然他の品詞に接続する例を見る必要があるが、現段階では分析が十分に行えていないため、この点に関する詳細な分析は今後の課題とし、本稿では、5節で簡単に触れるに止める。

なお、ガには、ケドにはない「逆条件」を表す用法や終助辞的用法があるが²⁾、これらの用法はひとまず考察の対象から外し、本稿ではガ・ケドを基本的に同じ意味・機能をもった助辞として扱う。また、ケドには「けれど」「けれども」といった形態的なバリエーションがあるが、「ケド」で代表させる。

2. 分析方法

2.1. 対象とする資料

先行研究では、1節で取り上げた(c)のような例について、「聞き手(読み手)を意識したテキストで現れる」ことが指摘されている(高橋1999)。そこで、本稿では、聞き手との関わりを見るために、現代日本語で書かれた小説の〈会話文〉から収集した用例を対象に分析を行う。具体的には、戦後出版された現代日本語の小説40作品から収集した、名詞句にガ・ケドが接続した用例全930例を対象とする。稿末に用例の出典作品リストを付しておく。なお、他のテキストタイプの場合についての分析は今後の課題としたい。

2.2. 分析の観点

1. で述べたように、ガ・ケドの用法の異同には、それが用いられている文の文法的な特徴が関わっていると考えられる。その一つが文の構造である。

1. で見た(a)(b)(c)の例における文の構造を簡略化して示すと次のようになる。以下、それぞれを「タイプ1」「タイプ2」「タイプ3」と称す。

- (a) AはNだが、B。 : タイプ1
- (b) (Aは)Nだが、B。 : タイプ2
- (c) Nだが、B。 : タイプ3

(Nはガ・ケドの接続する名詞句、AはNに対応する主語相当の語句、Bはガ・ケドに後続する部分を表す。Nの伴うコピュラ(モダリティ形式とくみあわさったものも含む)は「だ」で、接続助辞は「が」で、Aの伴う助辞は「は」で代表させている。これ以外

の形態、あるいは助辞をとらないという意味ではない。)

タイプ別の分布は【表1】のようになる。タイプ1が7割以上を占めている³⁾。タイプ2と3はともに、全体の1割程度である。

【表1：文の構造別の用例の分布】

| タイプ1 AはNだが、B。 | タイプ2 (Aは)Nだが、B。 | タイプ3 Nだが、B。 | その他 | 合計 |
|------------------|--------------------|----------------|-----|-----|
| 679 | 93 | 102 | 56 | 930 |

結論を先取りして述べれば、この3つのタイプは、次のような観点から見て、それぞれ異なる特徴を有する。以下のiからvの文法的特徴を視野に入れた総合的記述は、従来なされていなかったものである⁴⁾。

- i . 文の構造
- ii . Nのタイプと構文的機能
- iii . Aの有無とタイプ
- iv . Bのタイプ
- v . コピュラの形式の制限の有無

以下では、まず、タイプ1～3とした文の構造タイプ別に、iからvの文法的特徴を記述し(3節) そのうえで、ガ・ケドの用法との関係を考察することにする(4節)。

なお、【表1】の「その他」には、慣用句的なものや、タイプ化するには数が少ないため、位置づけを保留しているものなどのほかに⁵⁾、数量名詞の例が14例含まれている。Nが数量名詞であってもタイプ1またはタイプ3に分類できるものもあり、そのようなものについてはそれぞれに分類しているが、タイプ1～3のいずれにも分類できないものがある。数量名詞には、その語彙的な性格にも文中でのふるまい方にも、他の名詞とは異なる点がある。そこで、用例数は少ないものの、数量名詞に特徴的な構造を「タイプ4」として認め、上記タイプ1～3の特徴を述べたあとで触れることにする。

3 . 各タイプの特徴

本節では、実際の用例を挙げながら、文の構造タイプごとに、2.2.に示したiiからvの特徴について述べていくことにする。なお、ここでは文法的な制約を見ることを中心にし、用法との関係については、次の4節で考察する。

本節以降、用例中の「Nだが」に相当する部分には実線を、「Aは」相当部分には点線

を、「B」に相当する部分には波線を施して示す⁶⁾。本文中では、用例の出典を、用例末尾に「(作品名冒頭2～3文字・ページ数)」の形で示す。末尾にこの表示がないものについては、筆者による作例である。また、用例を引用する際には、紙幅の都合により、原文の改行部分をスラッシュ「/」で示す。

3.1. タイプ1の場合

タイプ1は、基本的に「AはNだが、B」の構造をとるものである。ただし、用例4)5)のように先行文脈からAが自明である場合には、同一文内に現れていないこともある。(用例4)5)では、先行文脈に示されたAに相当する語句を点線で示しておく。

このタイプには、以下のような特徴がある。

3.1.1. 名詞句のタイプ

名詞句Nのタイプに制限はない。「Nだ」は主語Aに対して〈述語〉として機能する。

Nが(ア)「アメリカ人」「自信家」「美人」「やさ男」「大酒飲み」「独身」などの、特徴を表す名詞である場合や、(イ)「もの」「人」「女」などの名詞が形容詞を伴っている場合には、Aの特徴を述べるものとなる。

- 1) 「あの方、どこの国の方でしょう……」/と茶碗を取りに来た若い婦人が萩乃にきいた。/「髪の色が黒くって背も余り高くないですわね」/「あれはアメリカ人だけれども、スペイン系の人なんですよ。二世か三世なんだけれども、あの人には可也り濃くスペイン人の特徴が残っていますね……」(後略)(雪燃・208)
- 2) 「あなたはとうとう、本当に芝居をやって見る気はないですか。(中略)……背丈、肉つき、身のこなし……。まあ舞台人としての条件は充分ですな。俳優なんていう職業は謂わば水商売ですが、自分の個性とか自分自身の表現とか、そういう創造的な仕事ですからね。毎日おなじ事務的な仕事の繰り返しとはちが違います。つまり自分というものが役の中で生きているんです。」(後略)(独り・149)
- 3) 「ぼくはかなり自信家だったが、このごろは自分がこの世に何の取柄もない存在だと思ふようになっていたんだ。」(後略)(塩狩・198)
- 4) 長瀬はなかばやけぎみに、絹子の薬指にはめてあるダイヤの指輪を見つめ、/「それは本物ですか?」/と訊いた。/「はい。古いものですけど本物です。死んだ父が買ってくれましたの」(ドナ・234)
- 5) 「ドルを持ってないかって、聞いたろう、あいつ」/「うん。それとPXで使う購買カードが欲しいって。(中略)」/「悪いやつだけど、なかなか器用な男なんだな。」

汗水流して担ぎ屋をやるより、よっぽどてっとり早いってことだ」(地下・128)

- 6) 「家内の無礼を許して下さい。あれは悪い女ではありませんでしたが、自分の仕事のことになると、配慮とか思いやりなどというものを、完全に、どこかへ置き忘れてしまふところがありました」(風祭・115)

次のようにNが固有名詞(及びそれに準ずるもの)である例もある。この場合、Nは特徴を述べるものではなく、対象を指し示すものとなる。この種の例では、「AはNだ」が、いわゆる「ひっくり返しの文」やウナギ文(「はしより」の文)となっている⁷⁾。

- 7) 「一番大切なものって?」 / 「絵の才能だよ。私の生命そのものだよ。そりゃああの子に最初に絵筆をとらせたのは私だけれど……最初の頃は稚拙な絵だったからね、むしろこの子の体には私の血も才能も一滴だに流れてはいないと安心してた。けれどこの二、三年の柗平の絵は確かによくってきた……(後略)」(花塵・295)
- 8) 「うちがトップで、二百票も開いているのに、なんでそんな意地の悪いことをするんだろ。うちはお祖父さんの代から、ずっと朝日をとってるんだワ。まわりのうちは、みいんな河童新報か河童新聞だけど、うちは三紙みいんなとってるんだワ。朝日の販売店の前田さんから、特別に頼まれたことあるワ。(後略)」(幸福・295)

このほかに、話し手自身を表す固有名詞(及びそれに準ずるもの)が「Nだが」の形で現れることもある。この場合、Aは一人称代名詞(もしくはそれに準じて用いられる指示代名詞「こちら」となる。この種の例については、3.1.4.で改めて触れる。

3.1.2. Bのタイプ

ガ・ケドに後続する部分Bのタイプにも、特に制限がない。平叙文の例が中心だが、質問文や依頼文も現れる。

- 9) 「(前略) あんたはいい選手だけど、パフォーマンスってのは苦手だしな」(ファイ・27)
- 10) 「(前略) 気がついた時には、ぼくたちは相変わらずヒヨロヒヨロの苗木だが、君はいつの間にか見上げるような大樹に育っているのではないかと思うよ」(塩狩・207)
- 11) 「京成医大というと、今度多摩のほうに出来た……」 / 「そう、あの人は、その精神科教授の有力候補だったんだけど、名前が出ていない」(脳は・243)
- 12) 「これまで相田義男がかかった病院は錦糸町の小杉病院と両国の江端病院、それに、向島の広川病院ですが、そこへ梅沢講師が行く可能性がありますか」 / 「ないな

……」(脳は・306)

- 13)「(前略)でもサイキック・インスティテュートってえらそうな名前だけど、何の組織なんだろうかね」(後略)(ファイ・173)

なお、依頼文の場合、その依頼内容に関わる対象を示す名詞が、形容詞を修飾語として伴いつつ「Nだが」の位置に現れる例が見られる。「ふつつか者ですが」「つまらない物ですが」など慣用的な例を見ると、場面によりAが自明であるために、「Aは」が現れないことも多い。また、この時に用いられる形容詞は、名詞の示す対象に対する否定的な評価を表すものとなる。

- 14)「あの写真のことは、もう忘れましょう。私は、とにかくあなたに仕事を頼みたいの」／真理は、とも子の気持をよく分かっていた。／「小さな仕事だけど、やってくる？ギャラだって安いけど……」(後略)(恋物・166)
- 15) (前略) 帰りぎわに、長靴を履きながら和倉は言った。／「永野君、ばかな奴だが、三堀の面倒をみてやってくれないか。そうだ、あいつにならさっきあんたが言ったヤソの話も聞かせてやってくれよ。おれにはそう必要のない話だがな」(塩狩・316)

3.1.3. コピュラの形式

このタイプでは、コピュラの形式に制限がない。名詞句Nが述語として機能しているため、Nの伴うコピュラは、文の表す内容に応じて過去形や否定形もとる。また、「かもしれない」「だろう」のようなモダリティ形式とくみあわせることも可能である。(コピュラ形式やモダリティ形式について言及する際には、普通体の形で代表させる。以下も同様である。)

- 16)「ルームメイトを紹介しに来たの？」／「ユキちゃんはルームメイトじゃないの。今までルームメイトだったけど、今度は別になるんだ。ね？そういえばユキちゃんのほうは、もう部屋決まったんだっけ？」(夜か・17)
- 17)「あんた、うちの英子、どう思う？」／「英子さんですか」／「そう」／「どうって」／「いい子だろ。あの子は美人って娘じゃないけど、健康で気持がさっぱりして、優しいところがあるんだよ」／「ぼくもそう思います」(青春・99)
- 18)「佐伯助教授が妹の彼氏だとしたら、それを告発する五十嵐弁護士が、姉の上司なのだから、もう少し穏便にはからうとか、とりやめてもらうとか、なんとかあったような気がするんだけど」／(中略)／「(※筆者注：二人は)前は恋人同士だったかもしれないけど、途中から仲が悪くなって別れた。だから」(脳は・226)

- 19) (前略) (※筆者注：後藤は) その時二十五歳。今から思えば若造だったんでしょ
うが、十六歳の私にとっては経験でも勇気でも資力や人脈でも神様のように偉く見えま
した。(後略)(花を・22)

3.1.4. ガ・ケドの用法

ここまで見てきたように、タイプ1では、名詞句NはAに対する述語として機能してい
 る。ガ・ケドは、「AはNだが」と、後続部分Bで述べられることがら間の関係を表す。
 しかし、その関係はさまざまである。

後続部分Bにはまず、「Nだ」で示される特徴とは異なる（評価面ではプラスとマイナ
 スで対立するような）Aの特徴を述べるもの（用例20）や、Aとは異なる主体につい
 て、その特徴を述べる「対比」的なもの（用例21）が見られる。このほかに、「AはN
 だ」から当然予想される帰結に反する出来事、いわゆる「逆接」関係にあることがらを述
 べるものもある（用例22）。

- 20) 「ここだ。向かいは大望館といつてな、昔っからの学生下宿屋だ。どっちも今にも
ぶっ倒れそうなオンボロ家屋だが、部屋代は安いし、家主が親切でな。それに
 /と、緒方は声をひそめると信介の耳もとで囁いた。(青春・31)
- 21) 「私も共犯よ。あなたをかくまっているんだもの」 / 「それとこれとは別だよ」 /
 「どうして？同じよ」 / 「俺は犯罪人だが、あんたは違う」(彼女・240)
- 22) 「本当に、やるのね」 / (中略) / 「もちろんだ」 / 吉川は肯いた。「僕は、ちっとも
度胸のある人間じゃないが 約束は守る (※筆者注：話し手は事前に聞き手に頼ま
 れ、ある人物の殺害を約束している) (窓か・218)

タイプ1にはさらに、次のように、「AはNだが」が、Bを述べるにあたって、補足的
 な説明を与えるものとなっている例もある。

- 23) 「で、奥さんは？」 / 「店で、客が来ていて、ゆっくり話をきけなかったんですが」
 / 「家にはいなかったの？」 / 「行ったんですがいなかったの、店を探していった
 んです」 / 「上野の小料理屋だな」 / 「“あおき” というこぢんまりした料理屋です
が、そこで下働きというより、仲居のような感じで」(脳は・20)
- 24) 「練れば練るほどいいのよ。それとヤッキになればなるほど香りが出るの。このやり
方を教えてくれたの、わたしの大学の先生の奥さんなんだけど、一番美味しくなるの
は夫婦喧嘩した後なんだって。頭にきてガリガリやるでしょ」(砂の・78)

先に挙げた用例12)や13)では、Bが、真偽の確定しない質問文であるためか、「対比」「逆接」的關係が感じられず、「AはNだが」が、Bの内容を問う前提として述べられているかのように感じられる。(下に用例を再掲しておく。)

- 12)「これまで相田義男がかかった病院は錦糸町の小杉病院と両国の江端病院、それに、向島の広川病院ですが、そこへ梅沢講師が行く可能性がありますか」(脳は・306)
- 13)「(前略)でもサイキック・インスティテュートってえらそうな名前だけど、何の組織なんだろうかね」(後略)(ファイ・173)

また、「AはNだ」が、話し手の名前や身分を名乗るようなもの(つまり、Aが一人称主語、Nが固有名詞あるいはそれに準ずるもの)で、Bも平叙文でない場合には、後続する部分に述べられることがらとの間に、直接の論理的な関係は成立しなくなる。この種の文では、Bに述べることがらを伝えるにあたり、話し手が聞き手に自身が何者であるかを伝えるために「AはNだが」が用いられている。初対面の相手との談話、あるいは電話での談話の冒頭に現れる。なお、この場合は、コピュラが基本的に「だ」「です」に制限される。

- 25) 助教授も一旦、坐ったが、すぐ思い出したように立上り、机の前のインターホンを押してからいった。／「佐伯だが、お茶を二つ持ってきてください」(脳は・158)
- 26) 手はずは考えてある。ブザーを押し、／「聖カトリック学院の同窓会の者ですが、このあいだ集まりがあって、英子さんにお花でも供えていただくということになりました……」(Vの・254)

3.1.1.~3.1.3.で見えてきたように、タイプ1には文法的な制約がほとんどない。ここまで見てきた文法的特徴のみからでは、タイプ1の文における「AはNだが」とBとの関係を、必ずしも明らかにすることはできない。しかし、1節で簡単に触れたように、他のタイプには文法的な制約が見られ、ガ・ケドの用法も限られてくるようである。以下で、このことを確認していく。

3.2. タイプ2の場合

タイプ2は、「AはNだが、B」という構造をとりうるが、「Aは」に相当する部分の存在が義務的でないという点で、3.1.で見えたタイプ1とは異なる。なお、構造上「Aは」のない「Nだが、B」という形が自然であり、この点からはタイプ3に分類されるべき例でも、以下の観点から、タイプ3ではなく、タイプ2に入れているものもある。

- ・「Aは」の存在が任意である例との連続性
- ・名詞句Nの機能

タイプ2として認められる例は、名詞句Nが、言語・思考活動を表すものであるか、評価的な態度を表す形容詞（以下、単に「評価的な形容詞」と称す）を伴ったものであるかという観点から、以下の2つに下位分類できる。それぞれを2A、2Bとする。両グループには、その他の文法的特徴においても、異なる特徴が見られる。

2A：Nが言語・思考活動を表すもの

2B：Nが評価的な形容詞を伴うもの

用例数はそれぞれ、48例、45例とほぼ同数である。以下では、この下位グループごとに特徴を見ていく。用例の中には両グループの特徴を併せもつものもあるが、ここではそれぞれの基本的な特徴を述べていく。

3.2.1. Nが言語・思考活動を表すものの場合

3.2.1.1. 名詞句のタイプ

タイプ2Aに現れる名詞句Nのタイプは、以下のような、《言語活動》《思考活動》を表すものに限定される。タイプ1では、Nのタイプにこのような制限はない。

《言語活動》を表すもの：「話、噂、伝言、報告、情報、言いつけ」など⁸⁾

《思考活動》を表すもの：「考え、推測、憶測、想像、勘」など

- 27) 「これは野田の話なんだが、実は一週間ぐらい前から、ミエちゃんに尾行がついてたらしいんだ。(後略) (黄金・235)
- 28) 「これも噂ですが、なんでも巢鴨のあたりで働いていたとか」 (脳は・140)
- 29) 「誰かが、毒入りの飲み物を持って来て、母に飲ませて、容器は持ち去ったってことでしょうか」 / (中略) / 「これは、わたしの考えですが、どうも自殺というのは、おかしい気がします。(後略) (風祭・109)
- 30) 「これは僕の推測ですが、先生が評判のよくない東辰病院で手術をなさったということが、まずかったんじゃないませんか」 (脳は・182)

3.2.1.2. Aの有無とタイプ

Aは、ガ・ケドに後続する部分Bを指示する「これ」に限定される⁹⁾。

ただし、この「これは」の存在は義務的ではない。「これは」のない次のような例もある。また、「相談だけど」のように、「これは」がない方がむしろ自然なものもある¹⁰⁾。

- 31) 「ええと、実はいいニュースがありましてね。昨夜、鷹杉君のところで女の子が生ま

れました。母子共に健全だそうです。(中略) / 「いやあ、よかったです。何となくずっと、いつ生まれるのが気にしてました」 / 「奥さんからの伝言ですがね、名前は約束の通りにします、ということでした」(陸影・221)

- 32) 電話が再度、かん高く鳴った。(中略) / 「何かわかったんですか」 / 「鑑識からの報告なんですがね」と、田辺警部補は鼻の脇をこすりながら、この場に不釣合いなほどのんびりした口調で言った。 / 「ホシは二名ってことです。靴跡……スニーカーの跡が二種類、いたるところで確認されましてね」(彼女・67)

- 33) 「ねえ、相談だけどさ、わたしどこか働くところないかしら」(独り・125)

3.2.1.3. Bのタイプ

ガ・ケドに後続する部分Bのモダリティ形式は、Nの示す《言語活動》《思考活動》のタイプに対応したものとなる。

Nが「噂」や、「話」(「人の」「人から聞いた」といった修飾語を伴う)のような《言語活動》を表す名詞句であれば、Bの述語は、「～らしい」「～とか」「～という(ことだ)」「～そうだ」などの、《伝聞》であることを表すモダリティ形式をとる。なお、用例35)は、「AはNだが」とBが倒置になっている例である。Bに相当する前の文の述語形式が、伝聞を表す「～そうだ」になっている。

- 34) 「これは土地の古い人から聞いた話だけど」 / (中略) / 「昔、このあたりって、お金を配る時に蒟蒻の中に入れたっていうの」(幸福・262)

- 35) 「(前略) もともと叔父は小学校のころから図画が上手だったので、大阪に出て就職したのも工場の製図工でした。見習いから本雇いになったそうですが、その大阪では夜間の洋画学校に通っていたそうです。これは死んだ父の話ですが、どっちにしてもその程度ですから、たいした画ではありません。」(天才・208)

Nが《思考活動》を表す名詞句であれば、Bの述語に、思考動詞や、《推量》や《推定》を表す「～だろう」「～じゃないか」といった形式が用いられる。

- 36) 「ところで、お前はどこへ行きたい？アフリカか？シベリアか？ / ...いや、これは俺の想像だが、お前はもう、人間のいる土地でも何でもいいのだろう。きっとそうだと思う。こんなことを言うのは気恥ずかしいが、お前は確かに変わったぜ」(黄金・351)

- 37) 「列車といっても、いろいろありますが」 / と、亀井が、いった。 / 「これは、とっぴな推理かも知れないんだが、新井は、青森へ向かったんじゃないかと、思うんだ

よ」(寝台・55)

3.2.1.4. コピュラの形式

このグループではNの伴うコピュラの形式は、基本的に「だ」「のだ」に限定される。

- 38) 「(前略)しかし、あの家主は中久保さんが抑えているようですから、やはり手出しはできません。だが、これはわたしの想像ですが、彼女は真野町にも帰っていないし、向こうからも小山の画を人が持ってきているとは思えませんね」(天才・223)
- 39) 日曜日というのに松原は編集部にいた。(中略) / 「あの、火渡さんの言いつけなんです」 / 松原は何でしょうと機敏に言った。松原にはファクスの送信元の話をしていなかったので説明し、そのファクス番号を伝えた。(ファイ・164)

先の用例37)では「かもしれない」とくみあわさっているが、これはNが「とっぴな」という評価的な形容詞を伴っていることと関係していると思われる。次の3.2.2.を参照されたい。また、次のように、否定形や、「かもしれない」などのモダリティ形式とくみあわさる例もあるが、この場合、名詞とのくみあわせが固定化しているようである。過去形は現れない¹¹⁾。

- 40) 「凄いじゃない。りっぱな監督さんだわ。私なんて経験もないのよ。自慢じゃないけど、今まで一度だって映画なんか撮ったことないんだもん」(ニュー・22)
- 41) 「父は、二度わたしを見捨てたのよ」 / (中略) / 「言い訳にすぎないかもしれないけど、二度目の時の原因は、私ではないのよ。日比大作と私は八年前に知りあったのよ」(砂の・226)

3.2.2. 評価的な形容詞を伴うものの場合

3.2.2.1. 名詞句のタイプ

名詞句Nは、形式名詞「こと」、または「話」や「言い方」などの名詞が、「恥ずかしい、いやな、変な、馬鹿な、失礼な、ひどい、とんでもない」といった、否定的な評価態度を表す形容詞(または相当形式)を伴ったものである。肯定的な評価を表すものは基本的に現れない¹²⁾。

- 42) 「お恥ずかしいことですが、私、主人のこと、あまり知らずに結婚しました。それで、今頃調べたりして……」(風祭・238)
- 43) 「班長、実はおかしな話なんですが……」 / 「何だい」 / 「蕁麻疹、直っちゃったんです」 / 「いつから」(陸影・199)

なお、用例42)の「お恥ずかしいことですが」を「お恥ずかしい話ですが」に、用例43)の「おかしな話なんです」を「おかしなことなんです」に、言い換えることができるように、この場合の「話」と「こと」は言い換え可能である。

3.2.2.2. Aの有無とタイプ

このグループの場合、「Aは」のない「Nだが、B」という構造が基本的である。

- 44)「何故、わかったの。私がここにいるってこと。誰かに聞いたの？」／「話せば長いわ」／「彼も一緒なのよ。今、私、彼を待ってるのよ。私……、ねえ、私、とんでもないことだけど、彼のこと、好きになって……」／全部を聞き終わらないうちに令子は「わかるわ」と、目をしばたたかせ、顔を歪めながら芝居がかった仕草でうなずいた。(後略)(彼女・258)
- 45)(前略)和倉は、部下の全員各自の席に着かせた。／「いやな話だが、いま給料がひとつ紛失した。きょうは外から人がきていないから、いやでもこの部屋にいた者に嫌疑がかかる。全員目を固くとして、自分の給料を机の中に入れてほしい。わたしが目を開けよというまで、決してあけてはならない。もしまちがって、二つ給料袋を持っているものがあれば、二つ机の中に入れてほしい」(塩狩・266)

しかし、先の用例37)「これは、とっぴな推理かも知れないんだが、・・・」のように、2AのNに見られた《思考活動》や《言語活動》を表す名詞が、否定的な評価形容詞とくみあわさっている場合には、「これは」の存在も不自然とは言えない。

3.2.2.3. コピュラの形式

タイプ2Bでも、2Aと同様に、コピュラの形式は、「だ」「のだ」が中心であるが、「かもしれない」が用いられることもある。なお、次の用例46)の「大した話ではないかもしれないんだが」のような例における否定形は、肯定形式との対立をなすものではなく、「大した話ではない」全体で一つのフレーズになっていると考えられる。

- 46)この日二人はとりあえず石神井署に出向いた。風間のニューヨークでの生活について、向こうに到着した捜査員から情報が入ったと聞いたからだ。／「大した話ではないかもしれないんだがね」／捜査主任の小林は、レポート用紙に書かれた報告書を見ながらいった。「向こうでの調査によると、風間はあまり日本人とはつきあっていない。交際範囲はもっぱら美術学校の仲間達だ。ただその頃の仲間の話だと、奴の友人に一人だけ日本人がいたらしい」(眠り・155)

- 47) 「でも、梨果、くれぐれも変なふうに落ち込んだじゃだめよ。ひどい言い方もしれないけれど、あの人はもともとそういう運命だったのよ。梨果はまき込まれただけなんだから」(落下・260)

ただし、今回収集した用例では得られなかったが、「あまりいい話ではないのだが、実は・・・」のように、名詞とくみあわせる形容詞が肯定的な評価を表すものである場合には、コピュラは否定形をとり、名詞句とコピュラ全体で否定的な評価を表すものになるとも考えられる。この点については、今後検証をしていきたい。

3.2.2.4. Bのタイプ

2 Bグループでは、先の用例(42)から(46)のように、評価的な形容詞とくみあわせる名詞が「こと」「話」などの場合には、Bは基本的に平叙文となる。「相談」「質問」「お願い」などの名詞であれば、2 Aと同様に、Bはそれに対応して質問文や依頼文となる。

- 48) 「不躰な質問ですが、妹さんと佐伯さんのあいだにはなにが……」 / 「それをききたくていらしたのですか」(脳は・237)
- 49) 「(前略) つきましては、突然のあつかましいお願いですが、後藤さまの所有になるその映画のフィルムを、貸し出してはいただけないでしょうか、という依頼なのです。(後略)」(最愛・99)

3.2.3. ガ・ケドの用法

3.2.の冒頭で述べたように、タイプ2の「Aは」は義務的ではなく、むしろないほうが自然な場合もある。この点で、「AはNだが、B。」が、タイプ1のような複文を構成しているとは言いがたい。

2 Aグループでは、「Aは」があるとしても、ガ・ケドの後続部分Bを指示する「これは」に制限されている。「Nだが」にとって「Aは」が主語であるとすれば、「Nだが」は、間接的にBに対して叙述する部分ということになる。Nに現れる名詞は、このグループでは、《言語活動》《思考活動》を表すものに制限されている。そして、Bの述語はその名詞が表す活動のタイプに応じたモダリティ形式をとっていた。これらのことから、「Nだが」は、後続するBのモーダルな側面に関わる特徴を表していると考えられる。

一方2 Bグループでは、Nに、形式名詞「こと」か、「話」「言い方」などの《言語活動》に関する名詞が現れる。(なお、この場合の「こと」は、「話」と置き換え可能である。) 2 Aと異なるのは、否定的な評価態度を表す形容詞を伴っており、名詞句の意味の

中心がこの形容詞となっていることである。評価にはその評価を受ける対象が必要となる。このグループでは、形式上「Aは(これは)」に相当する部分がないことが多い。文中にも、先行文脈にも「Nだが」で述べられる評価の対象を示すような語句がなければ、それが後続する部分で述べられることがら、あるいはその述べ方に対してのものであると理解されるのであろう¹³⁾。

3.3. タイプ3の場合

タイプ3は、「Nだが、B」の構造をとり¹⁴⁾、「Nだが」が文頭に置かれる。3.2.で見たとタイプ2もこの構造をとることが可能だが、タイプ3は次の点でタイプ2とは異なる。

3.3.1. 名詞句のタイプ

名詞句Nは基本的に固有名詞である。普通名詞の場合は、ダイクティックな指示詞(及びそれに準ずるもの)を伴う。

50) だがこの時電話をかけていた刑事が振り向いていった。 / 「キャップ、森井靖子ですが、バレエ団を休んでいるそうなんです」(眠り・206)

51) 「大分二期計画ですが、当初の計画どおり推進したいと考へます。社の内外に異論があり、情勢が日々厳しさを増していることも承知していますが、(後略)」(生命・250)

52) 「とにかく、わかっただろう。それから、いつか会ったあの女の子だが、あれはお前の妹だ。待子という名前だ」 / 信夫は泣くことも忘れて父をみた。(塩狩・36)

53) 「俺のこの店だけどさ、このあたりで平屋建てっていうのは目立つらしくてね。ビルに立て直さないかという話が連日のように舞いこむんだ」 / 卓は話の内容を変えた。(砂の・458)

54) 「じゃあ何だ。早く言いたまえ」 / 「ゆうべの賭けですが、あれはやはりぼくの勝ちだったのかもしれない」 / 「なんだって?」(青春・210)

55) 「さっきの話だけど」 / (中略) / 「あなた、本当は酔っぱらって私の家に来ようとしたんじゃないの?」(地下・85)

普通名詞が単独で現れることもあるが、この場合、名詞の示す対象は聞き手も知っているものに限られる。

56) 「見合いだけどなあ、断ってくれないか」 / 「気がすすまないのは判ってたよ。(後略)」(あ・う・78)

- 57) 「お仏壇ですけどね、あなた、お母さんを一人にするのは淋しいでしょうから、一緒にこちらへ運びませんか」(恍惚・117)

高橋(1999)は、指示的名詞句Nが「Nだが、～」の形で現れ、主題を提示する例を取り上げ、その場合、提示される主題要素は、聞き手がその指示対象を特定することが可能な要素であると指摘している。「Nだが」で示された対象が、その発話の話し手または聞き手によって、A系の指示詞で指示されている例からもこのことが確認できる¹⁵⁾。

- 58) 「どうしても、お訊ねしたいことがあってやって来たんですよ」／沖山は人なつこい目をした。／「なんですか。いったい」／「和子の……妻の所持品ですが……」／「あれは、残らず、そちらへお返しした筈ですが……」／「写真がありませんでしたか」／「写真……」(風祭・123)
- 59) 「話ってなに？」／「実は」／「借金ならお断わりよ」／「そうじゃないんです」／(中略)「さあ、話さない、聞くわよ」／「実は学生証のことなんですが」／「うん」／「緒方さんをお願いして、あれをおあずけしましたね」(青春・105)

また、上記のような名詞が、「【名詞】のことだが」と、形式名詞「こと」とくみあわせることも可能である。

- 60) 「その女のことだけど」／声の調子を低くして、美人なの?と、涼子は訊いた。(落下・103)
- 61) 再び、沈黙が流れる。今度口を開いたのは室田の方だ。／「あのね、さっきの推薦状のことなんだけど、うーん、かなり難しいね」(幸福・243)

「こと」とのくみあわせについては、義務的な場合とそうでない場合とがあるようである。例えば上の用例60)の場合、「その女だけど、美人なの?」と、「こと」を使わなくても文意は変わらないが、次の用例62)では「こと」がなければ、文の意味が変わってしまう。逆に「こと」の使用が不自然となる場合もあり、必ずしも「こと」の使用は任意ではない。詳細な分析は今後の課題とする。

- 62) 「それで、おまえの父親のことだけど、どうしても母親の口を割らせたいわけか」／(霧の・21)

3.3.2. Bのタイプ

後続する部分Bの文のタイプには、特に制限がない。

3.2. で見たタイプ2では、Nとの関係でBの文のタイプに制限が見られた。これに対し、タイプ3では、Nのタイプに関わらず、Bにはさまざまな種類の文が現れる。

- 63) あの女性ですが、告訴をしました。 : 平叙文(断定)
告訴するかもしれません。 : 平叙文(推定)
どうして告訴をしたんでしょう。 : 質問文
告訴をやめさせてくれませんか。 : 依頼文

3.3.3. コピュラの形式

コピュラの形式は〈断定・非過去・肯定〉の「だ」「のだ」に制限される¹⁶⁾。

タイプ3の場合、名詞の伴うコピュラの形態は固定されており、特に制限のなかったタイプ1の場合とは異なる。また、「かもしれない」などのモダリティ形式とのくみあわせが見られない点で、3.4. で見るタイプ4とも異なる。

- 64) 「さあ、まだくわしいことはわからん。で、その上着だが、やはり茶褐色のシミが背中のあたりの裏地に付着していた」(眠り・88)
 65) 「まあ、ありがとう。で、マローノ、レゴン・ダンスのことなんだけど、あなた、本当に詳しいの?」(花を・386)

3.3.4 ガ・ケドの用法

タイプ3では、「Aは」に相当する部分がない。対応する主語となりうるような対象が(先行文脈にも)ないため、「Nだが」は述語とはならず、名詞本来の、対象を指し示す機能を果たす。当然、複文は構成しない。

構造上は、タイプ2の2Bグループとよく似ているが、2Bの場合、名詞句Nは対象を指し示す機能ではなく、形容詞とくみあわることによって評価を表す機能を果たす。この点で、タイプ3と2Bとは異なっている。

先の用例52)や54)のように、「Nだが」で示される対象が、後続部分Bで、改めて指示詞によって示されることがある。このことから、「Nだが」は、直接Bと関係を結ぶものではなく、「桜、それは日本のシンボルだ」における「桜」のように、後に述べられることがらを提示する、独立の部分であると考えられる。また、用例55)のように、「さっきの話だけど」と、それ以前に話題にしたことを指し示す例が見られたり、用例59)のように「話って何?」という問いに対する答えとして「Nだが」が現れてくることから、「主題提示」(高橋(1999))の機能を果たしていると考えられる。

3.4. タイプ4（数量名詞）の場合

ここまで、名詞にガ・ケドが接続する例を3つのタイプに分け、その特徴をそれぞれ記述してきたが、数量名詞にガ・ケドが接続した例には、それらとは異なるタイプの例が存在する。名詞の中でも数量名詞は、その意味的な側面のみでなく、ゼロ格（はだか格）の形で修飾語になれるという点で（鈴木1973：200参照）、文中でのふるまい方も特殊な名詞である。

数量名詞にガ・ケドが接続する例には、次節で挙げる用例(66)のように、一見「Nだが、B」という、タイプ3と同様の構造をとっているように見える例がある。しかし、①「Nだが」の文中での位置、②Nの機能、③コピュラの形式の制限、の3点において、タイプ3とは異なる。そこで、用例数は少ないものの、この種の数量名詞の例を「タイプ4」として立てておく。ただし、少ない用例数から観察できたことであるため、今回挙げた特徴については、多量のデータをもとにした検証が必要である。

3.4.1. 「Nだが」の位置

タイプ3では、「Nだが」の位置が文頭に固定されていたのに対し、Nが数量名詞であるタイプ4の場合には、文頭以外の位置にも現れ、必ずしも文頭に固定されていない。

66) 「寝てたんじゃなかったの？」／と絹子が言った。／「三十分だけど、よく寝たよ。

三人の話が弾んでるみたいだったから、手紙を書いてたんだ」(ドナ・262)

67) 閑静な住宅街を抜けて行く近道。両側に大きな屋敷の塀が続き、見通しもわるくほんの四、五メートルほどだが、さびしいところがある。(後略)(Vの・143)

3.4.2. Nの機能

タイプ3では、「Nだが」は、聞き手も知っていることを指し示す、「特定指示」の機能を果たしていた。しかし、Nが数量名詞であるタイプ4では、量を表すのみで、特定指示の表現とはならない。

68) 「大学生の時、一ヵ月だけどロスに語学留学させてもらったの。(後略) (落花・135)

ただし、数量名詞であっても、ダイクティックな表現とくみあわさった次の用例(69)のような場合には、ある特定の時点を指し示すようになる。この場合はタイプ3となる。

〈タイプ3〉

69) 「それで、明日からの三日だけど、どこに行く？ どんなものが見たい？」／「どこか

推薦してくれないか？最近はバリに来るたびにあちらこちらに行っているんだろ」
 (花を・439)

3.4.3. コピュラの形式

タイプ3では、コピュラは〈断定・非過去・肯定〉の「だ」「のだ」に制限されていた。しかし、タイプ4の場合、コピュラが「だった」のような過去形をとることも可能である¹⁷⁾。ただし、過去のことを述べる文だからといって、過去形の使用が義務的なわけではない。肯否の対立については、3.4.4.で触れる。

70) 「(前略)大森ちささんは前に、ほんの二日三日だったけど、ピラージュでパートタイマーをやっていたから知っているのね、中の構造とかを」(Vの・286)

71) 「父親はそんな嘘をつく人ではなかったので、間違いなくそういう絵は実在したはずです。父は一度だけだが、確かに当時の稲木さんの家でそういう絵を見たし、それまでのスランプを破った本当なら稲木の出世作になる絵だったと言っていましたね」
 (花塵・124)

3.4.4. その他の特徴

以上、少ない用例ながら、タイプ3との相違という観点から、タイプ4の特徴を挙げてきた。以下には、今回収集したタイプ4の用例からうかがえることを挙げておく。用例数が限られており、さらなる検討が必要なものではあるが、ここで取りあげる特徴は、文中で数量名詞とよく似たふるまいを見せる程度副詞にも共通して見られる特徴である。

3.4.4.1. 数量名詞の表す量の多寡とコピュラの極性

タイプ4においては、Nは数量名詞である。数量名詞そのものは、量の多寡に直接言及するものではない。しかし、このタイプ4には、数量名詞が「ほんの」「たったの」といった少量であることを表す程度副詞や、限定を表すとりたて助辞「だけ」を伴っている例が見られる。逆に、数量名詞にくっついて、多量であることを表す助辞「も」を伴った例などは見られない。また、数量名詞単独の場合も、「一度」「一瞬」のように、基本的に少量を表すものに偏っている。この場合、伴うコピュラはすべて肯定の形をとっていた。

今回の用例では確認できなかったが、程度副詞の例を見ると、多量を表す程度副詞がタイプ4の構造で現れる場合には、コピュラが否定の形をとる。このことから、数量名詞の場合にも、少量なら肯定形、多量なら否定形とくみあわせり、全体としては少量あるいは非多量を表すのではないかと考えられる。

3.4.4.2. Bのタイプ

タイプ3の場合、Bのタイプに特に制限がなかったが、タイプ4の場合、基本的にBは平叙文である。また、今回得られた用例には、否定述語の文はなかった。程度副詞の例を見ても、同様の傾向が見られる。ただし、内省で、「わたしは今日、1時間だけけど、授業をさぼった」というのを、「わたしは今日、1時間だけけど、授業に出なかった」と、否定形式で言うことは、可能なように思われる。今後コーパスなどを利用し、このような例の有無、あるいは量的分布を確認したい。

3.4.5. ガ・ケドの用法

名詞句Nは、文中に示された対象や動き・変化などの量を規定している。この点は、数量名詞がゼロ格の形で文の修飾語となる場合と変わらない。

3.4.4.で述べたように、タイプ4の「Nだが」では、Nは基本的に少量であるものに偏る。少量を表す語句は、多量に対して、よりゼロに近いという意味で、Bで示される対象の存在、あるいは動きや状態の成立に、否定的な評価を与えるものといえる。程度副詞やとりたて助辞を伴わず、単独の数量名詞であったとしても、ガ・ケドが介在することで、肯定の形で示される対象の存在や動き・状態の成立との間に対立が感じられるようになる。つまり、ガ・ケドの使用により、その量を否定的にとらえているという話し手の態度が前面化するようになるのではないか。

このような対立を感じさせる点では、タイプ4におけるガ・ケドの用法は「逆接」用法と連続するものであろうが、既に複文を構成しておらず、「Nだが」の形で、否定的に量を限定する文の部分となっていると考えられる。文に述べられることがらの量的な側面に対する、話し手の否定的な評価態度を示すという点で、タイプ2Bに近いものであるとも考えられる。用例数が不十分であるため、用法の位置づけは保留するが、「逆接」用法や、タイプ2の、「発話行動への注釈」(小出1984)とされる用法との連続性が感じられる。

4. まとめ

本節では、これまでに見てきたタイプごとの特徴をまとめ(4.1.)、用法との関わりについて考察を加える(4.2.)。

4.1. 文法的特徴のまとめ

本稿では、名詞にガ・ケドが接続する例を次の観点から分析し、その中に大きく分けて

4つのタイプを認め、各タイプの特徴を記述してきた。

- i . 文の構造
- ii . Nのタイプと構文的機能
- iii . Aの有無とタイプ
- iv . Bのタイプ
- v . コピュラの形式の制限の有無

各タイプの特徴を整理すると【表2】のようになる。なお、表には最も典型的な例の特徴のみを挙げている。

【表2：タイプごとの特徴】

| | タイプ1 | タイプ2 | | タイプ3 | タイプ4 |
|-----|----------|-------------------------------|------------------------------|------------------------------|-------------------|
| | | 2 a | 2 b | | |
| i | AはNだが、B。 | (これは)Nだが、B。 | Nだが、B。 | Nだが、B。 Nだが：文頭固定 | Nだが、B。 Nだが：文中可 |
| ii | 制限なし。 | 《言語・思考活動》を表す名詞 | 否定的な評価形容詞＋「こと」「話」 | 固有名詞・指示詞 ＋名詞が中心 〈特定指示〉 | 数量名詞 |
| iii | あり。 | なくても可。ある場合は後続部分Bを指示する「これ」に制限。 | なし。 | なし。 | なし。 |
| iv | 制限なし。 | Nの示す《思考・言語活動》のタイプに応じたモダリティの文。 | 平叙文。 | 制限なし。 | 平叙文。 |
| v | 制限なし。 | 「だ・のだ」に制限。 | 「だ・のだ」及び非過去のモダリティ形式との組合せに制限。 | 「だ・のだ」に制限。 | 「だ・だった」に制限。 |

これらの特徴をもとに作成した、各タイプの例文を挙げておく。

タイプ1 : あの話は単なる噂だけど、多くの人信じている。

タイプ2 A : これは噂だけど、あの会社は倒産するらしいよ。

B : 信じられない話だけど、あの会社は倒産するらしいよ。

タイプ3 : あの噂だけど、本当でしょうか。

タイプ4 : わたしはほんの1ヶ月だけど、留学したことがある。

文の構造や、文法的諸特徴から、タイプ1が、典型的な複文を構成しているといえるのに対し、タイプ3や4は、もはや複文とは呼べなくなっていることがわかる。「Nだが」はBとともに「Nだが、B」全体で単文を構成しているのである。

形式上は複文らしさを保っているように見えるタイプ2も、Aが「これは」に制限され、ないほうが自然なものもあることから、タイプ1のような典型的な複文とは言えない。タイプ3やタイプ4のように、単文に近づいていると考えられる。

典型的な複文を構成しているとき、ガ・ケドは「AはNだが」とBで述べられることの間関係を表す機能を果たしている。タイプ2～4では、複文は構成せず、ガ・ケドの機能も変化していると考えられるが、その機能の違いに応じて、文の様々な文法的特徴に制約が生じているようである。次の4.2.では、上に挙げた特徴と、ガ・ケドの用法との関わりについて考察する。

4.2. ガ・ケドの用法との関わり

タイプ1では、「Nだが」が述語として機能し、典型的な複文を構成する。文法的な特徴の面での制限が最も少ない。タイプ1のような文では、ガ・ケドがいわゆる「逆接」「対比」だけでなく、さまざまな関係を表している。今回注目した文法的特徴のみから、用法を特定することは難しい。さらなる分析のためには、談話の構造を視野に入れる必要がある。例えば3.1.4.で、用例23)について、Bを述べるうえでの補足的説明を加えているように見える、としたが、このように感じるのは、「AはNだが」で述べられることがらと、先行文脈との間関係を意識するからかもしれない。(用例を再掲する。)

23)「で、奥さんは？」／「店で、客が来ていて、ゆっくり話をきけなかったんですが」
 ／「家にはいなかったの？」／「行ったんですがいなかったの、店を探していったんです」
 ／「上野の小料理屋だな」／「“あおき”というごんまりした料理屋ですが、
 そこで下働きというより、仲居のような感じで」(脳は・20)

また、同じくタイプ1でも、自己紹介の文については、用いられる場面が限定され、談話のタイプや構造面から、特徴づけを与えられるかもしれない。

一方、タイプ2～4には、さまざまな点で制限がある。この制限は、ガ・ケドの用法の異同と関わっていると考えられる。

タイプ2は、「発話行動への注釈」などと称される用法である(小出1984)。このタイプでは「Nだが」は後方指示の「これは」を主語に持つことにより、後に続くBの発話内容や述べ方について言及するものとなっている。名詞のタイプが《言語活動》や《思考活

動》に関わるものや、評価的形容詞を伴った「こと」「話」などに制限されていることから、用法との相関性がうかがえる。また、コピュラの形式が、非過去形式に限定されることも、「今」述べることへの言及であることと連動していると考えられる。

タイプ3は、「主題提示」などと称される用法である（小出1984、高橋1999）。ここに現れる名詞句は、対応する主語相当の語句を持たず、述語としての機能は果たさない。また、現れる名詞句は、基本的に固有名詞やダイクティックな指示詞を伴った普通名詞である。これは、タイプ2とは異なり、このタイプにおいては名詞句が、対象を指し示す働きをしていることと関連しているであろう。また、この場合のNが示すのは、聞き手も特定可能な対象である。それゆえに、談話の冒頭で突然「Nだが、…」と差し出されても、聞き手はすぐにその対象を同定し、これから話されることがらであると理解できるのではないか。コピュラの形態が〈断定・非過去・肯定〉の形をとることも、これから述べる「主題」を差し出すという働きから、と考えられる。

タイプ4については、「Nだが」の位置が、文頭にしばられない、という点から、「主題」を表すタイプ3とは区別される。また、事物を指し示すのではない、数量名詞特有の性質も、影響を与えているであろう。名詞句が少量を表すものに偏る点、基本的に肯定述語の平叙文で用いられる点などから、「逆接」用法や、「発話行動への注釈」用法との連続性がうかがえる。しかし、3.4.5.で既に述べたように、用例数が少ないため、用法の位置づけは保留としておく。

5. 今後の課題

5.1. 今回の分析で問題となった点

本稿では、ガ・ケドが名詞句に接続する例を対象に分析を行い、タイプ2、タイプ3のように、文法的特徴と特定の用法との強い関わりが示せたものがある一方で、タイプ1のように、両者の関わりが十分に示せなかったものもある。4.2.で述べたように、文脈、談話の構成といった広い視野を取り入れ、さらなる分析に取り組みたい。

また、タイプ1～4の間の相互関係についての考察も行えていない。タイプ1から制約を受けつつ派生していったものではないかと予想されるものの、これを検証することはできなかった。今後の課題とする。

5.2. 他の品詞の例との関係

最後に、今後の課題として、名詞以外の品詞にガ・ケドが接続する例について触れ、今

後の展望を記しておく。

1. に記したように、本稿で扱った用法が、名詞句特有のものであるかどうかについては、他の品詞に接続する例との比較なくしては、確認できない。これまでに筆者が確認した範囲で、この点について触れておく。

「逆接」用法や(用例72)、73)、「発話行動への注釈」に当たる用法は(用例74)、75) 動詞や形容詞の場合にも見られる。

72)「(前略)五年前にある月刊誌の記者が彼が絡んだ不正融資事件をスクープしかけたんだが、すぐに握りつぶされた」(羊を・95)

73)「(前略)「俺には兄弟がないから。(筆者注：俺は)小さい時は親が取ってくる餌を独占して有利だったが、今は不利ということになるか」(花を・181)

74)「だったら私思うんだけど、あの子があなたに望むのはこれ以上甘やかされることではないような気がするの。(後略)」(砂の・162)

75) こんな話、梨果には不愉快かもしれないけれど、と、さっき電話で健吾はまじめに言った。／「華子とはじめて会ったのは空港なんだ」(落下・30)

また、タイプ4のような数量名詞に特徴的な用法は、程度副詞にガ・ケドが接続する例にも見られる。数量名詞と「たくさん、少し、ちょっと」などの程度副詞には連続性があり、タイプ4の構造をとる場合、現れる程度副詞は、基本的に少量を表す「少し、ちょっと」などとなる。多量を表すものが現れる場合には、コピュラが否定形となる。

76)「いまのままがいいです。友人には毎日少しだけ金を払うことにしました。二人の酒代に化けてしまいそうだけど」(霧の・250)

77)「そのまま逃げ帰ったわけね」／「ええ。でも、部屋の中に、ほんのかすかだったけど、香水の香りがあって、それが前に嗅いだ匂い……。ヴィラージュ?」／と問いかけ、弥生が頷くのを見てから、／「柘榴の木の家で嗅いだものだと思ったの。それからお父さんのお葬式の時……。(後略)」(Vの・284)

しかし、「主題の提示」用法となる、タイプ3のような例については¹⁸⁾、名詞にガ・ケドが接続する場合に特徴的な用法であろう。これは、動詞が《動き(動的属性)》を表し、形容詞が《特徴(静的特徴)》を表すのに対して、名詞が基本的に《事物》を表す「指示機能」を有していることと相関している。

他方、動詞や形容詞にもそれぞれ特有の用法があると思われる。例えば次のような、話

し手が聞き手とのやり取りの中で、自身の発話行動を宣言するような用法は、動詞特有のものと考えられる。

78) 「言っとくけど、後悔させるために来たんじゃないわよ、わたし。恥じてもらいたいのよ。」(後略) (砂の・27)

79) (前略) 「僕がいったということは、絶対に誰にもいわないでください」 / 「もちろん。私達を信じてください」 / 「じゃあいいですが、僕は東都大学で梅沢講師の研究グループにいるのです」 / 「ええ」 / 「それで梅沢先生と比較的親しいのですが、去年の秋に、帝都大学の佐伯助教授のことをいろいろきかれたのです」(脳は・295)

3.2.2. で見たタイプ2Bにおける名詞句が、評価形容詞を伴うものであり、その意味の中心が形容詞であることを考えれば、上に挙げた用例75) のような例は、「梨果には不愉快な話かもしれないけれど」と言い換えることができることがわかる。しかし、次のような例では、名詞を用いた言い換えは想定しにくい。ある種の形容詞に特有のものである。

80) 「ごめん、わかったよ。悪いけど、真吾たち、ちょっと席はずしてくれないか」(A列・114)

決して網羅的なものとは言えないが、名詞以外の品詞に接続する例に見られる用法について、簡単に触れた。ガ・ケドの接続する語の種類によって、特有の用法、共通の用法があることがうかがえる。今後はこれらの例についてもより詳細に分析し、接続する語の種類を含めた文法的諸特徴と接続助辞ガ・ケドの用法の関わりについて総合化を試みたい。

【注】

1) 「一は」と「一だが」の違いについて、小出(1984)は、①「一だが」の用いられた例は談話の冒頭にあることを想定させること、また②「明日の天気ですが、明日は・・・」のように、「一だが」で示されたものを、「一は」で受け直す例があることを指摘している(なお、この逆がないことも高橋(1999)により指摘されている。) ここから、「一だが」のほうが「一は」より大きな主題(「談話主題」)を提示するのに用いられると小出は述べている。また、「一は」には置き換えにくい「一だが」があることも指摘している。今回収集した用例の中でも、これらのことは確認できている。

2) ここで言う「終助辞的用法」とは、いわゆる「言いさし」的なものではない、次のようなものである。接続する語の形態は、「～だろう(でしょう)」に限られる。

・「前に、母さんだって言ってたでしょうが。ほかの誰よりも、雅雄に関係のあることなんですよっ

て。(後略) (今夜・146)

3) 対応する主語相当の語句を補うことができるという意味で、「Nだが」がいわゆる「挿入句」として働いていると思われる例をタイプ1に準ずるものとして、ここに含めている(15例)。

・「これは紀元前三百三十一年にあった、アレクサンダー大王とペルシャのダリウス三世との戦いの模様をあらわしたものです。千六百年に、いまから三百八十年ぐらい前ですが、ブリュッセルからここへ運んで来ました」(ドナ・66)

4) 野田(1995)では「前置き用法」におけるノダの使用、高橋(1999)では、「指示的名詞句+だ・です+が」による主題提示用法、というような、一部の用法の文法的特徴に関する部分的な記述はあるものの、総合的な観点からの記述は行われていない。

5) 次のようなものを「その他」に分類している。

以下のものについては慣用句的なものとして、扱いを別にしている。

○「こんなこと言うのも(こう言うては)／私が言うのも何だけど」

・「市が買い取ってくれなかったばかりに、結局は建売住宅がいくつも出来ましたよ。全く、この行政の奴らぐらい、文化とか自然というものがわからない者はいないと思う」／「あのね、私たち、奥さんにこんなこと言うのもナンなんだけど、この河童市は元から変えていかなきゃいけないと思うのよ」(幸福・114)

・「そうしようかとも思ったんだけど、彼女のことは、真緒さんとは関係ないから」／「関係ない?」／「真緒さんと僕って、結婚なんて面倒なものとは別なところで付き合ってるわけだろう。こう言うては何だけど、僕が結婚するのは彼女に対する責任なんだ。確かに昔は好きだったけど、今は愛とか恋とかいうのとは違う。(後略) (イブ・106)

また、次のような例については、用例数が少ないため位置づけを保留している。

○「指示的名詞句+ではないが」

・「おじさん、ジャズの関係の人?」／「いや、そうじゃないがジャズは好きでね。どうだろう。温ったかいものでも食べない? さっきの唄じゃないが、外は寒いし」／そんなふうに見知らぬ娘を誘える自分が、野田には不思議だった。／「いいよ。でも、あたし、お金ないから」／「もちろん、楽しい気分にさせてもらったお礼にご馳走させていただこう。何にしようか?」(A列・175)

○タイプ3の構造をとり、Nが非制限的修飾節を伴った名詞句であるもの。

・番組の司会者と芸能リポーターとが映り、笑顔で話し始めている。／「いやあ、驚きましたね」／「これまで全く浮いた噂のない柳沢マリ子さんですが、何と、八歳年下の恋人がいるということが、発覚してしまったんですね」／再び白黒の写真が大映しになる。都内の某マンションから出てくる柳沢マリ子と青山良助が映し出されていた。(幸福な・107)

このような例は会話文では少なく、本稿では保留扱いとした。ただし、高橋(1999)で指摘されているように、小説の地の文のようなテキストタイプでは、この種の用例が相対的に多く現れる。他のテキストタイプを合わせた分析では、この種のものも1つのタイプとして立てる必要があるかもしれない。ほかに、タイプ1かタイプ2か、あるいはタイプ2かタイプ3か、いずれか判断のつきかねるような例も、「その他」に入れている。

- 6) Bに相当すると考えられる部分が「Nだが」を含む一文にとどまらず、後続する文にまで達すると考えられるものもあるが、本稿では、原則「Nだが」を含む文の文末までの部分に波線を施すものとする。
- 7) Aが「変項名詞句」(西山2003)の場合もこれらに準ずるものとみなせる。
- ・「その候補者を絞るのは誰が」／「教授選考委員会みたいなのがあつたんです。新設大学の場合、学長が中心ですが、私立大学の場合には、他に理事とか評議員もくわつたようです」／「京成は国立でしたね」／「ですから選考の中心も学長でしようが、でも学長一人で、すべてを決めるといふわけでもありません」(脳は・246)
- 8) Nが「秘密、オフレコ」や「ここだけの話」のような例もこのタイプに準ずるものであろう。
- ・「あのね、これも秘密なんだけれど」／とさっきの娘が声をひそめて、／「資生堂ではね、政府の命令で、今、高級香水をそつと作つているのよ」／「香水？」(ファー・12)
- 9) 金水・田窪(1992)では、コ系の指示詞による文脈指示の中に、後方文脈指示があることを指摘し、木村(1983)の記述から、この種の文脈指示に認められる二種類の類型を、下のようにまとめている(p.142)。
- a. [指示表現Ⅰ]は(=主題)P1 {けれど／が...} [指示対象の文]
 - b. [指示表現Ⅱ]{が／を}P2. [指示対象の文]
- 今回本稿が対象とした用例は、aの類型に当たる。金水・田窪(1992)は、この「指示表現Ⅰ」は、「これ」「この{話／こと／・・・}」など、指示的な名詞句であり、P1は、指示対象の属性を規定する述語であると指摘している。そして、aは、指示対象文について「メタレベルでの注釈を与えることを目的とする」ものであるとしている。
- 10) Nが「相談」の場合、「物は相談だが」という形で現れることもある。このくみあわせは慣用的なものであり、この場合の「物は」を、「相談だ」に対する主語とは考えにくい。この意味で、タイプ1とはやはり異なる。
- ・「あのねえ、旦那。物は相談なんだけれど、ドルが軍票をお持ちだったら、とつかえて貰えないですかね。(後略)」(地下・119)
- 11) 「自慢」の場合、コピュラが肯定の形をとつた「自慢だけど、～」という例は見られないし、内省でも考えにくい。「言い訳」という語には、否定的な評価が含まれていると考えられる。後述するが、N

が否定的評価を表す形容詞とくみあわさったものである場合には、この種のモダリティ形式が現れやすい(先の用例37)も参照されたい。「自慢」「言い訳」などの例は、この種の例に連続するものと考えられる。また、言語活動・思考活動を表す名詞であっても、コピュラが過去の形をとっている次のような例は、単に先行文脈との関係で主語が省略されている、タイプ1の例である。

- ・「あの……お亡くなりになったのは、お母様なんでしょう?」／「いいえ。英子さん」／「本当でしょうか」／「噂話でしたけど、本当だと思いますよ」(Vの・238)

12) 否定的な評価態度を表すとはいえない「重要なこと」「大事なこと」などの例もあったが、これらは注8)に挙げた「秘密」「オフレコ」などの例に準ずるものと考えられる。

- ・「担当者には電話で連絡を取ります。三時にはここにいると思います」と相棒は言った。／「結構です」と言って男は腕時計に目をやった。「それでは四時に車をよこします。それからこれは重要なことですが、この件に関しては一切他言は無用です。よろしいですね?」(羊を・93)

また、「大きなお世話」のように、形容詞と名詞のくみあわせ全体で、Bを述べることへの否定的評価を表すようなものもある。

- ・「地下鉄の駅で、奈美さんに会ったよ。話があると喫茶店に誘われた。そして、大きなお世話かもしれなくても、久仁子は子どもを欲しがっているわ、産ませてあげなさいよ、と彼女は言ったよ。(後略)……彼女はそう言って、僕を問いつめたよ。口紅のついた前歯をむき出してね」(A列・25)

13) 工藤浩(1997)では、「評価成分」(もしくはそれに準ずるもの)として機能するものの一つに、「前置き節・挿入句など」を挙げ、その中に「恥ずかしい話だが」などのガ・ケドの例も挙げている。そして、この種の節や句が評価的に働くのは、形容詞の働きが大きいと指摘している。形容詞の評価性については、八亀(2001)を参照されたい。

14) 用例の中には、「話というのは何か」という問いに対する答えとして、この種の「Nだが」(このような場合、Nが「~のことなんだが」という形になることが多い)が現れることがある。この種の例について、主語が潜在しているとも考えられるが、既にそのような存在を前提としないような用いられ方が定着していると考えられる。

- ・「北川。悪いニュースというのを話せよ」／「ああ。それが……言いにくくてな。春樹のことなんだが……」(黄金・64)

15) なお、タイプ3の用例には、表記上「Nだが」までで閉じ括弧が付され、Bとの間にポーズがおかれていることが示されているものもある。ここで、相手の反応となる発話が挿入されることも多い。この点もタイプ3の特徴と言えるであろう。

- ・「お店の……村林さんのことですけれど」／佐和木は読みかけの雑誌から、妻の顔へ視線を移した。／「なあに……」／「折角、同じグアムへみえているんですから、今夜あたり、夕食にお誘い

したら……」／「さあ、それは、どうかな」(中略)「折角の、君の好意だけれど、彼女にとっては迷惑かも知れないよ」(風祭・172)

- ・夏というよりは、山の上のここではむしろ秋めいた水の面を、細かな波が左から右へ動いて行く。その水の皺を見つめながら、正ちゃんがいった。／「さっきの話だけ」／「え？」／「『六の宮の姫君』」／「ああ」／「肝心なことを聞かなかったな」／「なあに？」／「キミ自身の、『六の宮の姫君』という作品に対する気持ちさ」(六の・108)

16) 高橋(1999)も、この種の例では過去形(「だった」)が現れないことを指摘している。なお、固有名詞や指示詞を伴った名詞が「Nじゃないが、B」という形で現れることがある(注5)も参照されたい。この場合名詞句は、主題を示す働きはしない。Nと同じ特徴を備えた別の対象について話す際に用いる表現のようである。用例数も少ないため、2.2.で示した【表1】では、「その他」に含めている。ここでは用例を挙げるに止め、分析は今後の課題としたい。

- ・(前略)奇跡としか言えない。普通ではなかったんですもの。荒武ではないけど、私も毎晩樹彦の亡霊に苦しめられていたし。(後略)(ニュー・324)

17) 否定形の例は現時点では得られていないものの、対象を数量名詞に限らず、頻度や程度を表す語句全般に広げるならば、コピュラが否定形をとる例も見られる。ただしそれは、その語句が多量を表す場合に限られる。数量名詞の場合も、文脈などからその数量が多量であることが明らかであれば、このような例が現れるのではないか。

- ・「毎日、画を描いていらっしゃるんですか？」／「毎日ではありませんが、よく画を描いておられるようですよ」／それだと相当に画が溜まっているかもしれないと思った。(天才・23)

なお、モダリティ形式とくみあわさった例は、現在のところ得られていないものの、「大森さんは、二、三日だったと思うけど、あそこで働いていたよ。」のような例はありうるのではないかと予想される。今後用例を増やして確認をしていきたい。

18) 「主題」を表すとされる形式は、「～は」「～って」など、ほかにも存在する。このような他形式との比較をすることで、ガ・ケドの接続する例の特徴をより明確にできると思われる。今後の課題としたい。注15)で簡単に触れるだけに止まったが、タイプ3においては、「Nだが」とBの間にあいづちなどの聞き手の反応が挿入されている例が見られる。他形式との比較を行うにあたっては、会話の構成、聞き手との関わりという観点からの分析も行っていくことが有効だと思われる。なお、この種の例について、丹羽(2000)は、ガ(及び同機能を持つとされるケド)の、「背景用法」即ち、「前件の背景のもとに後件が成り立つという関係を表す用法」の中に位置づけられるものとし、「前件の顕在要素が名詞で、後件がその属性を表すという関係にあるために、主題を表すと言えるようになってい

【参考文献】

- 井上都 (2002) 『現代日本語の数量名詞 ―デ格を中心に―』 2001年度大阪大学大学院修士論文
- 尾上圭介 (2004) 「主語と述語をめぐる諸問題」 尾上圭介編 『朝倉日本語講座 第6巻 文法2』 朝倉書店
- 木村英樹 (1983) 「「こんな」と「この」の文脈照応について」 『日本語学』 2 - 11
- 金水敏・田窪行則 (1992) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」 金水・田窪 (編著) 『指示詞』 ひつじ書房
- 工藤浩 (1997) 「評価成分をめぐる」 川端善明・仁田義雄編 『日本語文法 体系と方法』 ひつじ書房
- 工藤真由美 (1997) 「否定文とディスコース 「～ノデハナイ」と「～ワケデハナイ」」 言語学研究会編 『ことばの科学』 8 むぎ書房
- 小出慶一 (1984) 「接続助詞ガの機能について」 『アメリカ・カナダ連合日本研究センター 紀要』 7
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 高橋美奈子 (1999) 「‘判定詞＋接続助詞「が」’による主題提示を持つ文について」 『日本学報』 18 大阪大学
- 永野賢 (1951) 『現代語の助詞・助動詞』 国立国語研究所報告書3 秀英出版
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論―指示的名詞句と非指示的名詞句―』 ひつじ書房
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説』 くろしお出版
- 丹羽哲也 (1999) 「対立的な並列を表す接続助詞「が」」 『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』 和泉書院
- (2000) 「主題の構造と諸形式」 『日本語学』 19- 5
- (2004) 「主語と題目語」 尾上圭介編 『朝倉日本語講座 第6巻 文法2』 朝倉書店
- 野田春美 (1995) 「ガとノダガ 前置きの表現」 宮島達夫・仁田義雄編 『日本語類義語表現の文法(下) 複文・連文編』 くろしお出版
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2 意味と使い方』 角川書店
- 八亀裕美 (2001) 『現代日本語の形容詞述語文』 阪大日本語研究別冊1 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座

Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge University Press

Traugott, Elizabeth Closs (1995) Subjectification in grammaticalisation. In Stein, Dieter and Susan Write, (eds.) *Subjectivity and subjectivisation: Linguistic perspectives*. Cambridge University Press

【用例出典】

赤川次郎 (1985) 『窓からの眺め』 文春文庫版 (1988) 浅田次郎 (1997) 『地下鉄に乗って』 講談社文庫版 (1999) 阿刀田高 (1989) 『Vの悲劇』 講談社文庫版 (1992) 有吉佐和子 (1972) 『恍惚の人』 新潮文庫版 (1982) 池澤夏樹 (2000) 『花を運ぶ妹』 文春文庫版 (2003) 石川達三 (1977) 『独りきりの世界』 新潮文庫版 (1982) 伊集院静 (1992) 『瑠璃を見たひと』 角川文庫版 (1996) 五木寛之 (1971) 『青春の門 自立篇』 講談社文庫版 (1973) 江國香織 (1996) 『落下する夕方』 角川文庫版 (1999) 円地文子 (1964) 『雪燃え』 集英社文庫版 (1980) 遠藤周作 (1988) 『ファースト・レディ (上)』 新潮文庫版 (1992) 落合恵子 (1985) 『A列車で行こう』 新潮文庫版 (1988) 角田光代 (1998) 『夜かかる虹』 講談社文庫版 (2004) 片岡義男 (1992) 『最愛の人たち』 新潮文庫 (書き下ろし) 鎌田敏夫 (1984) 『恋物語』 角川文庫版 (1986) 北杜夫 (1994) 『母の影』 新潮文庫版 (1998) 北村薫 (1992) 『六の宮の姫君』 創元推理文庫版 (1999) 桐野夏生 (1995) 『ファイアボール・ブルース』 文春文庫版 (1998) 小池真理子 (1986) 『彼女が愛した男』 角川文庫版 (1988) 曾野綾子 (2000) 『陸影を見ず』 文春文庫版 (2004) 高樹のぶ子 (1990) 『霧の子午線』 中公文庫版 (1995) 辻仁成 (1996) 『ニュートンの林檎 (上)』 集英社文庫 (1999) 西村京太郎 (1988) 『寝台特急「ゆうづる」の女』 文春文庫版 (1990) 乃南アサ (1988) 『幸福な朝食』 新潮文庫版 (1996) 林真理子 (1999) 『幸福御礼』 角川文庫版 (2001) 東野圭吾 (1989) 『眠りの森』 講談社文庫版 (1992) 平岩弓枝 (1984) 『風祭』 角川文庫版 (1985) 松本清張 (1979) 『天才画の女』 新潮文庫版 (1982) 三浦綾子 (1965) 『塩狩峠』 新潮文庫版 (1973) 宮部みゆき (1998) 『今夜は眠れない』 角川文庫版 (2002) 宮本輝 (1985) 『ドナウの旅人 (上)』 新潮文庫版 (1988) 向田邦子 (1981) 『あ・うん』 文春文庫版 (1983) 村上春樹 (1985) 『羊をめぐる冒険 (上)』 講談社文庫版、村山由佳 (1995) 『青のフェルマータ』 集英社文庫版 (2000) 森瑤子 (1989) 『砂の家』 新潮文庫版 (1991) 山本文緒 (1999) 『落花流水』 集英社文庫版 (2002) 唯川恵 (1996) 『イブの憂鬱』 集英社文庫版 (2002) 連城三紀彦 (1994) 『花塵』 講談社文庫版 (1997) 渡辺淳一 (1974) 『脳は語らず』 新潮文庫版 (1991)

(博士後期課程学生)

(2006年8月25日受付)

(2006年10月5日修正版受付)

(2006年11月1日再修正版受付)

(2006年11月14日掲載決定)